

山形県が「紅花の山形」といわれる由縁は、口紅や紅花染めの原料である「紅もち」の生産が、江戸時代に質・量ともに日本一を誇ったことにある。

「最上千駄」（もがみせんだ＝馬千頭分＝120kg×1,000頭の「紅もち」生産）といわれ、実に全国の半数以上の生産量であった。

しかし、現在、山形県内の紅花畑に咲いている「最上紅花」をどれほどの人が見ているだろう？

紅花栽培、紅もち生産は、江戸時代末期、科学染料の赤が輸入されるようになると急激に減少し、明治時代になって統計上途絶えることになる。それが、第二次大戦後、山形市の出羽地区の農家から発見された種によって、かろうじてよみがえった。

現在の県内の紅もち等の生産量は100kg程度、すなわち、往時の1,000分の1である。需要に全く応じきれない。生産地は、白鷹町の十王地区、鷹山地区、山形市の高瀬地区や、河北町、天童市、寒河江市、酒田市など県内のごく一部の地域に限られる。

私は、「べにばな国体」の前年に白鷹町にUターンしてきた。

ご多分に漏れず、「県の花・べにばな」であるのに県内で咲いている紅花を見ることができない。県に種を分けてもらい、自分で咲かせることになった。一坪からの出発である。

白鷹町には、国の伝統的工芸品の「白鷹紬」や「深山和紙」など、地域と結びついた伝統産業が残っている。歴史をひも解けば、白鷹町でもかつて盛んに紅花が栽培されていたことが記録されている（古文書：「邑鑑」）。これらと連携した町おこしや地域づくりができるのではないかと思った。地域の中にも同じ思いの人たちがいたことから、平成6年、8名の有志で「白鷹紅の花を咲かせる会」を設立した。

山形県紅花生産組合連合会の指導を受け、伝統の「紅もち」を始め、「摺り花」、「乱花」の加工技術も習得し、江戸時代同様に、花を摘み、加工・出荷することになった。現在、白鷹町は県内の生産量の半数以上を産出するに至っている。

白鷹町で紅花生産が拡大した理由は、第1に、町おこしの一環として紅花まつりなどを開催し、楽しく栽培してきたことを挙げるができる。第2に、生産加工によるお小遣いが稼げることがある（加工品1kgあたり約30,000円）。第3に、全国から紅花の魅力に引かれて訪れる花摘み体験者たちとの交流があり、紅花栽培のやりがいと、栽培している者とし

ての誇りが感じられる——ことなどがある。

平成7年、兵庫県から紅花の摘み取りや染め体験に来たお嬢さんたちを歓迎しようと、手作りの「第1回白鷹紅花まつり」を開催した。摘み取り体験に訪れる人々に対応する必要性や当会の活動拠点として平成11年、自宅に隣接した「紅花の館」（はなのやかた）を開設した。紅花まつりは9回目から本町の観光の目玉として実施することになり、平成19年で13回を数えた。

紅花の魅力は、多方面にわたり奥が深い。栽培者

バリューサイト  
**VALUE SIGHT**

## 貴重さ増す、本紅の色、薬理 価値が再評価される県の花・ 白鷹町の振興部会が生産拡大

「県の花・べにばな」は染料価値が再認識されているほか、最近では薬理効果も認められ注目されている。しかし、本県のベニバナ生産量は栽培者の高齢化、後継者不足から伸び悩んでいる。白鷹町では鷹山地区で「紅花振興部会」を設け生産振興に再挑戦を始めており今後の展開に期待が集まっている。

の声などを集約すると、1つには歴史文化を感じることが挙げられる。紀元前の昔から栽培され、遙かなるエジプト地方からシルクロードを經由し長い時間をかけて日本、そして山形へと伝えられた紅花は、最上川舟運など歴史文化、文学的ロマンをかきたてる。2つに、紅花に含まれる赤色素は花重量のたった1%に過ぎず、残りの99%は黄色素である貴重なものであること。この紅の色素は塗り重ねると玉虫色になる。玉虫色に輝く赤は古来、女性たちのあこがれであるばかりでなく、赤色は、魔除けであったり、高い身分の象徴でもあったりした。3つに、紅花の薬理効果として、制ガン効果や抗酸化作用などがあり、脳疾患や成人病や婦人病などにも効果があるといわれている。4つに、紅花畑に咲く黄色の花は、早朝の光の中で鮮やかで愛らしい。アニメーショ

ン映画「おもひでぼろぼろ」は、その年代の乙女心を捉えていること——など、数え上げればきりが無い。

今後の課題は、これらの紅花の魅力や可能性をどう生かしていくかである。

明治以降途絶えてしまった紅花の復活に情熱を傾けた人々や栽培・加工・出荷に携わってきた人々には敬意と感謝の念でいっぱいであるが、その熱意が通じてか、今、京都のわが国の染織界の第一人者や、江戸時代から本紅をつくる老舗などとの出会い、伝統



紅もち干し

の総合学習などでも人気の紅花体験であるが、今後とも、教育・研修旅行やグリーン・ツーリズム、農業体験などの素材としては、山形県独自のメニューとして格好の素材であろう。

第3の理由は、企業との連携、あるいはコミュニティビジネスのための紅花栽培の振興である。口紅や和菓子の原料提供面では、老舗の企業等との連携が重要と考えるし、山形セレクションなどを活用し、最上紅花を地域資源として付加価値をつけたビジネス展開も必要ではないかと思う。これには、現在、県連合会が実施している紅もち等の品質規格の厳正な検査等も重要となる。

とかく、採算性や効率性が叫ばれる昨今だが、最上紅花の場合は、それらも配慮しつつ、歴史や伝統文化における価値、並びに最上紅花からできる「紅もち」の赤の唯一性なども考慮する必要があると思う。すなわち、これらを理解してもらえるように、しっかりと情報発信していくことが大事ではないだろうか。

「半夏ひとつ咲き」から山形を彩る紅花が、地域の風物詩として長く受け継がれることを念じてやまない。

## 置賜

## 効果… 最上紅花 目指す

白鷹紅の花を咲かせる会  
事務局長

今野 正明



ある最上紅花で、本物の染色（染織）や口紅を日本の伝統、技として残すべく、同じ価値観で紅花の今後を見つめる人の輪が広がっている。最上紅花の明るい展望のひとつである。

このことから、まずは、山形の伝統文化の継承としての紅花栽培が必要と考える。

その理由の第1は、山形の歴史・文化をひも解けば、必ずと言ってよいほど紅花に出会う。玉虫色に輝く紅は、最上紅花以外ではその代用ができないという。もし、紅花栽培がなくなれば、日本の本紅文化、山形の伝統文化が消えてしまうことになる。県を挙げて紅花栽培を奨励、支援してもよいのではないかと考える。

理由の第2は、交流・観光の素材としての活用である。摘取体験に訪れる人々のほか、学校教育の中

### ■ 今野 正明（こんの・まさあき）

白鷹紅の花を咲かせる会 事務局長。山形県紅花生産組合連合会 副会長。紅花の体験交流館「紅花の館」主宰。おきたま研究所 顧問。

1953年白鷹町生まれ。

〒992-0821 白鷹町十王1707-1

TEL・FAX 0238-85-1883 E-mail : k@shirataka.jp

URL : <http://www.sgic.jp/k/>